

岩手医科大学歯学会第77回例会抄録

日時：平成 26 年 7 月 5 日（土）午後 1 時より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C 棟 6F）

特別講演

在宅歯科医療の現在
～診療・ケア・リハビリテーションの融合～

菅 武雄

鶴見大学歯学部高齢者歯科学講座

高齢化率 25%。このショッキングなニュースは、実は予測され確定していた未来であった。超高齢社会に突入して久しい本邦であるが、この厳しい時代に、歯科的な対応は十分に行われているであろうか。高齢者歯科学は、社会に貢献できているのだろうか。

超高齢社会における高齢者歯科学の役割は、その対象を 3 つ挙げることができる。一つは「有病高齢者への安全で確実な診療」である。これは診療システムとして良くなってきた。2 番目は「通院困難、セルフケア困難な要介護者への対応」であり、3 番目が「食べる事の困難（摂食・嚥下障害）への対応」である。後者 2 つを合わせて在宅歯科医療の重要な課題となっている。

本講演では在宅歯科医療の現状について報告した。そこにはニーズとしての「歯科診療」、「（口腔の）ケア」、「（摂食・嚥下）リハビリテーション」の 3 要素があり、その比率が動的に変化することの理解が必要となる。在宅歯科医療が単に「通院困難な患者への対応」にとどまらず「生活環境の中での対応」に範囲を拡げていることが現場でのトピックスである。生活環境でこそ達成できる仕事があるのである。それが在宅歯科医療の核となる。訪問に出ると、そこに社会や地域が見えてくる。地域での役割、社会との関わりなどにも無関心でいられなくなるのが在宅歯科医療に関わるメンバ全員の一致した意見である。

歯科医療は外に展開しなくてはならない。胃瘦になったとしても、在宅や介護施設で経口摂

取の再開を果たすために、われわれは役割をもっている。患者さん、家族はそれを待っている。在宅歯科医療の究極の目的は「口から食べる」ことのサポートである。われわれは在宅歯科医療の診療方針の立案ツールとして「口から食べるストラテジー」を構築し、自分たちの仕事を明確にする取り組みを続けている。

一般演題

演題 1

口腔領域原発の滑膜肉腫でみられた
非定型部位における融合遺伝子の同定

○三上 俊成, 水城 春美*, 武田 泰典

岩手医科大学病理学講座病態解析学分野、
歯学部顎口腔再建学講座口腔外科学分野*

滑膜肉腫は軟部腫瘍の 5～10% を占めるが、口腔領域では比較的稀な非上皮性悪性腫瘍である。主に紡錘形腫瘍細胞からなる単層型滑膜肉腫と、上皮性分化も示す二相型滑膜肉腫に分けられる。病理学的には染色体相互転座 t (X ; 18) (p11 ; q11) に由来する融合遺伝子が病因に関与しており、鑑別診断においても融合遺伝子の検出が診断に有用である。融合遺伝子の型では約 2/3 が SS18-SSX1 を占め、1/3 が SS18-SSX2, SS18-SSX4 は 1% 未満である。一方、免疫染色で滑膜肉腫が強く疑われる症例でも遺伝子診断において融合遺伝子が検出されない場合が稀にあり、これは融合部位が従来型と異なる変異型によるものと考えられる。今回我々は、口腔領域に生じた二層型滑膜肉腫に従来型と異なる部位での SS18-SSX1 型融合遺伝子を同定したので報告した。遺伝子診断は肉腫の確定診断に有用である一方、遺伝子変異などのデータをさらに蓄積していくことが、より正確な診断のために重要であることが示唆された。